恨み晴らしの灰色月

希那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恨み晴らしの灰色月

【Ｎコード】
Ｎ６８５３Ｉ

【作者名】
希那

【あらすじ】
とある中学校に、いじめられっ子の少年がいた。
周りの大人は見て見ぬふり。
凶器を使われることもあり、ついには殺されてしまう…。
彼が殺された夜、復襲が始まる。
続編希望があったため、連載型に切り替えました。

第一話　復讐開始（前書き）

１１月１８日深夜　連載型に切り替えるにつき、多少書き換えました。

第一話　復讐開始

とある中学校、いわゆるいじめられっ子である少年がいた。
彼は、生まれ付き不幸だった。
生まれてすぐに親に捨てられ、今の育て親に拾われるまでの間にも、
酷い目に遭いながらの生きていた。

拾われてからも、今の親が本当の親では無い事や、
近くに居れば不幸に巻き込まれることなどから、
いじめを受けていた。
今の家に籠もっていても、結果は同じだった。
外から罵声を浴びせられ、家のひとが居ないときは、無理矢理押し
入られて殴られたりすることもあった。
こっちからやり返そうとしても、返り討ちにされるだけだった。
正直、相手のいじめっ子達が憎かった。
また、力の無い自分や、見て見ぬふりをする大人たちも憎かった。

中学校になってからは、いじめはさらにひどいものとなった。
ただ暴行を加えるだけでは飽き足らず、凶器を持ってくるような者
もいた。
つまり、殺されかけるような日もあったということだ。
しかし、今日は殺されかけるではすまなかった。

殺されたのだった。

人間には、絶望した。自分が楽しめれば後はどうでもいいとしか
考えていないのだから。
誰が殺し、誰が殺されようが、自分に関係なければ、知ったことで
は無いと人間は思っているのだろう。

僕が、そんな人間の一人であることに、憤りを感じたこともあった。

殺される瞬間、思ったことは、
「すべての人間が憎い」
ただそれだけだった。

急に、自分の意識が戻ってきた。
同時に、自分の姿が変わっていることに気がついた。
黒ずくめの少女に、そして、人を殺すのがあたりまえである「妖怪」になっていた。

場所はよく覚えている、自分が捨てられた森だった。
横には、切り株に黒一色の笛と、矢じりのついた大鎌が置かれていた。
触れると、使い方が頭に入ってきた。
笛は、いじめられっ子と、いじめっ子のそれぞれだけに聞こえる音色を奏でるもので、洗脳なんかもできるものだ。
鎌は、人間の首を刈るだけでなく、矢じりから妖気を流し、洗脳したものに妖術を使わせることもできる。

自分がするべきことはわかった。人間を滅ぼすこと。
今宵は満月、不吉なことを起こすには丁度良い。
月の満ち欠けによって妖怪達の妖気の大きさも変わり、今は最も大きくなる状態だからだ。
僕…いや、私の復襲劇は、これから始まろうとしていた。
地面を蹴り、私は夜空へと跳んだ。

いじめっ子の家には、扉や窓などを妖術ですりぬけて潜入し、そ

の家族ごと皆殺しにした。
むごいと思われるだろうけども、私…元々の僕が味遭わされた苦痛はこんなのではすまない。
人でなしと言われても、知ったことではない。すでに人ではないから。

すれちがった通行人を洗脳し、他の人間を殺させたりもした。
洗脳する為の音色だけは、どんな人間にでも効果があるようだ。
自分以外のいじめられっ子に恨みを晴らさせるのも、面白いかもしれない。

八件目の家では、いじめっ子女子が一人でおり、血の付いた鎌を持った私を見て怯えていた。
「お前の席、ねーから。」と他人の席を占領しながら言う女子がいた。
暗くて少しわかりにくいが、顔からしてこいつがその女子だろう。
だから、私は言ってやった。
「お前の助かる術(すべ)、もう無いから。」と。
その一言で、相手はこっちの正体が判りかけたらしい。
しかし、理解できずにもいるようだ。
それもそうだろう、こっちは見た目がまったく違うのだから。
判りかけた理由も解る。
こいつがさっきの言葉を使うのは、私に対してだけだからだろう。
私が相手に近づく。
相手は壁際で逃げられない。
相手の表情が、心が、これから自らの身に起こることを予想して恐怖に支配される。
私は、憎しみの感情を込めて鎌を振るい、相手の首を刎ねた。

私…元々の僕をいじめの対象にしていた人間は、ざっと六、七十

人はいたはずだ。
三日くらいに分けて、どう足掻くかでも見てみようか。
そんなことを考えながら、私の復襲は続いてゆく…。

…そういえば、何故少女になったのだろう？
まあ、妖怪は男より女のほうが妖気を操るのはうまいだとか、そんな理由だろう。
洗脳とか、けっこう妖気を使ったような気もするし、そういうことで納得しておこう。

第一話　復讐開始（後書き）

連載型に切り替えました。
前に投稿した短編は、消去する予定でしたが、一応残しておきます。
感想、アドバイス等を、お待ちしております。

第二話　新月にて、集落脱出（前書き）

連載型に切り替えるついでと言ってはあれですが、第二話です。

第二話　新月にて、集落脱出

僕…私が、憎しみの怨念の妖怪になって、およそ二週間。
人殺すことに、躊躇いとかはもう感じてない。
全ての人間を恨んでいるのだ、それくらいあたりまえだろうけども。
鎌の扱いも、だいたい覚えた。初めのときは、振り回したら標的の首に刃ではなく持ち手の部分が当たることがよくあった。
標的が恐怖などにかられて動けないでいるときは普通に鎌を引けばそれで首を刎ねることができるのだが…。
まあ、今はうまくやれているから問題ない。
…振り回すのが正しい扱い方なのかどうかは知らないが。

それはそうと、なぜかは知らないが自分の名前が思い出せない。
覚えていてもどうにもならないのだが。
新しい名前でも考えようかと少し前に思ったが、
自分にネーミングセンスが無いことは解りきっている。
…覚えさせる対象もいないしな。どうでもいいか。

そんな私は今、絶体絶命ほどではないが、いわゆるピンチという状態に陥っている。
…今日が新月だということを、調子にのって暴れていたため忘れていた。
おかげで妖気はあまり残っていない。何やってんだ自分…。
普通の妖怪は人を喰うことで生きている。そのため、人を喰うことで妖気の回復もできる。
しかし、私のような怨念の妖怪は、人を喰わなくても生きれるが、人を喰っても妖気の回復ができない。
周りの人間の感情（私の場合は憎悪）に反応して自分の妖気を回復させることは出来るが、さっきから怯えや焦りの感情しか感じ取れ

ない。
・・・周りに頼りにされている人間とか狙えばいいのだろうけど、そんな妖気も残っていない。
一旦引こうとも思ったけれど、狙った集落の奥のほうに来てしまったため、それはそれで大変っぽい。
…仕方ない、他に方法も無いし、見つからないよう気をつけながらこの集落から抜け出すか。

すでに何人か、騒ぎを嗅ぎつけた役人や警備兵、果ては武者（武装済み）までいる。
…ここのところ暴れまくっていたのは自覚しているが、ここまで危険視されるほどの殺戮した覚えは無い。
他の妖怪が近くに居るわけでもないし…狙いが私である事は間違い無いだろう。
…さて、ここまで来た道を思い出しながら、今日は引き返しましょうか…。

その後、隠れていて思った事がある。
暗い夜に黒い服（ついでに黒髪）ならほとんど目立たないのではないだろうか？と。

音を立てずに移動するのは、妖怪からしてみれば一応簡単だ。
問題は、松明の明かりや夜目の利く人間がいる可能性だ。
松明は持ち歩かれている物と、設置されている物の二種類と考えて良いだろう。
一方夜目の利く人間は、いなければありがたいが、いると接近が判りづらい。
気がついたら真後ろにいてバッサリと、なんて話も時折耳にする。
なんであれ、いない事を祈ろう。
…誰に祈ったのか自分でもよくわかっていないが。

妖怪が神に祈るわけにもいかんしな。

とりあえず高い所へ行き、周りを見わたしてみた。
そして、呆れざるをえない人間達の様子を目撃した。
集落の門前辺りしかしっかりと見張られていないのだ。
私の近くに見回りに来ているのは両手で数えられる程度しかいない。
…もう一つ門があったはずだ。
素直にそっちから出よう。

私は近くを見張っている何人かの首を刎ねる。
後ろから近づき、こちらの刃がとどく位置まで近づいたら、後は躊躇いなく、他の人間に覚られぬよう一瞬で。
ただし、自分の気配を完全に断つ妖術に使う妖気をなるべく節約できるように、殺すのは必要な数だけ。
罪悪感などは無い。
私が恨んでいるのはすべての人間。
いつかは殺すつもりでいた人間だ。
他の妖怪の食料が無くなろうと私の知ったことではない。

やっと、門前までこれた。
ここまで来れば捕まる心配は無い。
門は閉まってはいるが、楽に跳び越えることができそうだ。
むしろ、これを跳び越えられない妖怪はいないのでは？と思える高さだが。
私は、それを跳び越え、集落の外へと出た。
待ち伏せとかもされていなかった。
「さすがにあの人間達、無用心すぎじゃないかしら？」
私は、自然と声を出してしまった。
もちろん、誰にも聞こえてなんていなかったが。

今更気づいたのだが、妖怪になってから不幸が直っている。
もう二週間も経っていたのに、何故今頃…。

第二話　新月にて、集落脱出（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。
次回からは、更新速度を早くできると思います。

第三話　半月の夜、銃声が轟く（前書き）

予定より遅れたものの、第三話できました。

第三話　半月の夜、銃声が轟く

この世界に、名は無い。
六つの国があり、三つは人間が、二つは妖怪が、残り一つは人と妖が共存して、それぞれ支配している。
しかしそれはそこに住む者たちにとって六つなのであり、その六ヶ所のどこにも含まれない人妖共に未踏である地では、何者かが凄んでいる可能性があり、もし凄む者がいるのならば、それは七つ目の国が在るということになるかもしれない。
故に、この世界の果てを知る者は誰もいない。
この世界の全体を見ることができた者はいないのだ。
もしこの世界に名が付けられるとしたら、それは国が一つになり、未踏の地と呼べる場所が無くなった時。
しかしそれは、ありえない事。
神が放った、永遠に世界が広がりゆく術によって。

妖怪はともかく怨念には、普通人間は触れることはできない。
しかし、なにかしらの術を掛けられた武具や道具を通してや、対妖怪用の術を使えるような人間ならば話は別だ。
例えば剣。
普通の剣では、怨念を斬りつけるどころか実体を持つ妖怪に痛手を負わせる事すらできない。
一方特殊な剣ならば、実体を持つ妖怪を斬るだけでなく、怨念を斬りつける事もできるだろう。
そういった武器を持つ人間が、最近増えてきている。
こちら側からしてみれば、迷惑極まりない。
そんなわけで私は、そういった人間を中心に殺す標的を定めている。

運が良ければ、その武器を奪う事もできるしな。
そんな事を考えていた時だった。

背後から、銃声が轟く。
弾は普通の鉛弾だったため、私を通り抜けて行く。
もう一発、弾が発射される。
今度は、妖気が込められた弾だった。
すかさず、私はそれをかわす。

怨念は人を喰う事は無いが、生前の出来事から人を殺す事はある。
怨念では無い妖怪は人を喰うため、無駄に人を減らす怨念を毛嫌いしている。
つまり、怨念とそれ以外の妖怪とで、対立関係があるということだ。
妖怪同士の争いは、そういった事から起こるのである。
また、妖怪の支配する国が二つに分かれているのもそれが理由だ。

私に銃口を向けたまま、相手が口を開く。
「よく背後からの射撃を避けれるな」
「一発目が当たるはずの無い弾だったのだから当たり前よ。二発目が来る方向くらいそれで分かるもの」
私はそっけなく（少なくとも自分にはそう思える言い方で）返事を返す。
相手が手に持っている銃は、見た目はハンドガンのように見える。
しかし、相手の見た目は青年であるものの、妖気を放っているために妖怪だと解る。
「あれぇ？一発目も妖気を込めて撃ったつもりだったんだけどなぁ」
「…わざとらしいわね」
私が鎌を両手に持ち、攻撃の態勢に入る。
「そんなおっかない物持つなよ。こっちのやりたい事がやりにくいじゃないか」

…何故だろうか、少しイライラしてきた。
「…斬って良いかしら…？」
私が駆け出し、戦いが始まる。

私の攻撃を避けながら、相手が突如聞いてくる。
「…あんた名前は？」
一呼吸入れてから、私が答える。
「…生前の時の名前は忘れてるし、今の名前も特に決めて無いわよ。
というより、普通自分から名乗るものじゃないかしら？」
「奇遇だな、俺も大体同じような感じだぜ」
やっぱり、こいつと話すと何故かイライラする。
怠け者的台詞というか、チャラい口調というか…。
「お？お？何かスピード上がってねぇか？」
「…気のせいじゃないかしら？」
言いつつ、鎌を振るう速度を上げる。
むしろ私が意識しなくても自然に上がっていっているような気もする。
「…やられっぱなしじゃ終わるわけないか」
銃口がこちらを向き、銃声を再度轟かせる。

弾を避けながら斬るのはやはり少し大変である。
しかし初めて、まともな戦闘というものができた気もする。
そんな事を思っていた矢先、互いに攻撃が掠った。
互いの頬に少し傷ができる。
気に留めるような傷では、互いにない。
「相打ちね…。」
「…女の怨念にしては接近戦うまいんじゃないかい？」
互いに、声を掛ける。…気に入らないが。
互いの攻撃が再開する。そう思い、鎌を振るった。

スカッ

「あら？」
相手がどこかへいなくなっていた。
気配で探してみると、相手は遠くへ逃げていた。
「そろそろ手持ちの弾が切れそうだったんでね。今日は退かせていただくよ」
そんな声が聞こえた。

…何故だろうか、いまいちスッキリしない。
一発もまともに当てる事ができなかったからだろうか？
…考えるだけ、時間の無駄か。
今度合ったら絶対に一発斬るかぶん殴るかしよう。
そう心に決めた。

私のいまいち納得のいかない日の一回目。
願わくば、二回目は無く終わってほしいと思った。
けれどもそれは、限りなく叶う事は無いと後に知ることとなる。

第三話　半月の夜、銃声が轟く（後書き）

主人公と敵対するキャラクターを出してみました。
主人公は、基本的に怠け者や軽い性格である者が嫌いという設定を出したかったのですが…うまくできてますか？

感想やアドバイスなどをいただけたら幸いです。

第四話　十三夜月の下、出会うは力無き憎しみ　前編

とある屋敷の一室、怒鳴り声では無いが大きめの声が聞こえる。
「兄様？今度はどこへほっつき歩いていたのですか？」
少女が自分の兄に説教をしているようだ。
「わ、悪かったって。それに、たしかに戦ったけど…」
「仮にも妖怪の貴族であるあなたが何をなさっているのですか！！その上、頬に怪我をしてるじゃありませんか！！というより、戦ったのですか！？」
会話の通り、二人は人間では無く妖怪、それも、九尾の兄妹だ。
九尾は、持てる妖気の量で尾の数が変わる。
妹のほうは、尾が五本で、妖気の量は普通より少し上。
兄のほうは、尾が八本で、かなりの量の妖気を持てるようだ。
「あなたは一応将軍なのですよ！？頬にかすり傷があるだけだから良いものの、大怪我でもしたらどうするのですか！？」
「お、俺はこれでも結構強いほうだぞ？！大怪我なんてするわけが無い…はず」
言いながら、尾や耳を隠しながら戦っていたさっきの状況を思い出す。
こっちが本気ではないと言えど、自分とほぼ互角に戦った少女。
怨念、それも女でありながら、鎌による接近戦で自分を苦しめた少女。
もし彼女も本気で無かったとしたら、十分自分を大怪我させることができそうな気がした。
「聞いているのですか？！兄様？！」
「あ、悪い。途中から考え事してたわ」
「…まったく、ちゃんとトドメを刺してきたんでしょうね？」
「あー…。弾無くなったから、こっちから逃げてきちまった」
「へ？弾が無くなった？結構持って行かれませんでしたっけ？」

「いやぁ、使いきっちまって…今、手持ちの弾は無いぜ」
妹である少女が目をパチクリさせる。
兄の銃の腕は、草原を駆ける虎を横からハンドガンで狙い撃てるほど。
使いきるとはとても思えない。
「…相手は、誰なのですか？」
妹が聞き、兄が答える。
「鎌を扱う、女の怨念だ」

私は、先日遭遇した妖怪の男について調べるため、二つの妖怪の国の怨念側の方を目指して旅的な事を始めた。
詳しい場所を知っているわけでは無いが、まだ人間であったころに妖怪の国について教えられた。
妖怪の国は海を挟んで南北に分けられており、南側が実体を持つ妖怪の国で、北側が怨念などの妖怪の国であると。
今自分がいる大陸は、丁度北側の大陸だ。
位置的には、西へ向かえば辿り着けるはずだ。
私は、さっそくその方角へと向かった。

ちなみに、この世界の大陸の数は三つ。
その他島などが多く在るが、どの国の物とか決められていないのがほとんどだ。
地底にも何かが在るとかの噂も有るが、定かでは無い。

とある日、私は歩き疲れて木陰で休んでいた。
その後、うっかり眠ってしまっていたらしい。
行動のとりやすい夜はまだ明けて無いが、ある程度時間が経ってはいるだろう。
そう考えながら体を動そうとしたら…
「すう……」

左から、何者かの寝息が聞こえた。
よく見れば、相手の右手と自分の左手が重なっている。
無論、すり抜けてはいるが。
相手は、普通の人間の少女。
どう考えても、自分の恐れの対象にはならない。
その、はずなのだが…
「すう……」
なぜだろうか、左手が動かしずらい。
別に怨念と人間の体の一部が重なろうと、互いに何かの感覚がしたりとかは無い。
今、自分が左手を動かそうとこの人間が起きる事は無い。
それなのに左手が動かせない。
「どうしよう……」
手持ちの鎌も笛も、片手じゃどうしようも無い。
それどころか、殺そうという考えと逆のこと、殺したくないという考えしか何故か浮かばない。
もう、怨念になるよりもかなり昔に名前を忘れた感情の一つが頭の中にある。
それは、人間はおろか、他の何者にももう決して抱くはずの無いと思っていたもの。
何故そんな感情が今さら有るのだろう。

彼女（何でこんな呼び方しているのか自分でもよく分からない）の寝顔を少し見てみる。
見惚れるとかという言葉があったような気がする。
今の自分がその状態なのだろうか。
「可愛い」という言葉が、口から出そうになるが起こしてしまわないようにと喉元で止めた。
起こさなければ行動が取れないのだが、起こさないでおきたいと何故か思ってしまう。

「すう……ん…？」
そう思っていたら、とうとう起こしてしまったようだ。
「あ…おはよう…かな？」
「あら、隣で寝てても気づかなかった子ね」
「うっ、…どちらかというと、起こしてほしかった」
あれ、なんでこんなに暢気な会話してるんだろ自分。
「不思議な女の子が寝てたからつい一緒に寝ちゃって。手を握ろうかとも思ったんだけどね、何故かすり抜けちゃうし…面白いわね、貴女」
彼女の身長は、大体中三くらい。
私より上だというのは一目で解った。

「…一応、私は怨念なんだけど…」
「…怨念？」
彼女の表情が一変する。
やはり、警戒するか。
でも、そのほうが良いかもしれない。
さっきの、殺したく無いという感情が残っている。
彼女には、早く私から逃げて、遠ざかってほしい。
「最近現れた黒尽くめの怨念…そう、貴女が」
「そうよ、私がその怨念よ」
そう思っていたら、彼女はまったく予想外の言葉を口にした。

「だったら、…
…私の願いを叶えてくれるのは貴女なのね？」
「…え？願いを叶える？」
「貴女の場合、憎しみを司るのでしょう？私、一応恨んでいる人間

がいるもの」
「…恨みを晴らすための力が欲しいって事？」
「そう、私にはそれをするための力が無いの。だから、噂で聞いていた貴女の事を待ち望んでいたのよ。いきなり本人と会えるとは思っていなかったけれど」
彼女は自分が何を言っているのか解っているのだろうか？
自ら手駒にしてくれと言っているのだ。
私の持っている笛を使って。

しかし笛で洗脳できるのは、「いじめっ子」と「いじめられっ子」のどちらかには当てはまる者のみ。
言わば、子供であることも条件に含まれているのだ。
恨みが有るということはやられた側なのだろうけども、見た目的に彼女は十五歳ほど。
子供と大人の境に近い年だ。
術がうまく成功するかどうかわからない。
けれど…
「…恨みの対象の規模は？」
「人の屋敷一軒です」
なぜだろうか、協力してあげたい。
「分かったわ。術が成功するか判らないけど…やってみるわよ」
もし成功したら、普段みたいに捨て駒にはしない。
自分の手元に置いておこう。

第四話　十三夜月の下、出会うは力無き憎しみ　前編（後書き）

活動報告での予告に間に合わないでおきながら、
前後編に分けることに…。
待っていてくださった方、スミマセン。
後編はもう少し後に投稿することになります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6853i/

恨み晴らしの灰色月

2010年10月11日15時28分発行